

名賀郡 青山町 勝地～妙楽地

川南D遺跡・勝地中世墓群発掘調査報告

1994・3

三重県埋蔵文化財センター

序 文

埋蔵文化財は、郷土の歴史、文化を今日に伝える数少ないもののひとつです。これら、祖先の残した歴史的遺産は、貴重な財産として保護され、後世に伝えていくとともに、今後の文化の向上、発展の基礎として活用していかなければなりません。しかし一方で、地域経済の活性化あるいは、住民の生活や安全の向上のため、各種の公共事業が行われています。

こうしたなかで、三重県埋蔵文化財センターでは、文化財保護行政の一環として毎年各開発関係部局に事業を照会し、事業予定地内の文化財の確認とその保護に努めてまいりましたが、どうしても現状保存が困難な部分については、発掘調査を実施し、記録保存を図っているところであります。

ここに報告いたしますのは、県道伊賀青山線緊急道路整備事業に伴い、川南D遺跡・勝地中世墓群の消失する部分で発掘調査を実施した結果であります。この成果が、消滅した遺跡にかわって、郷土の歴史、文化を伝え、活用されることを切望するものであります。

最後に、協議から発掘調査にかけて多大なご理解とご協力をいただきました県土木部道路建設課及び上野土木事務所、青山町教育委員会、地元自治会の方々に心から感謝いたします。

平成6年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 久保富子

例　　言

1. 本書は、三重県教育委員会が三重県土木部から執行委任を受けて実施した、県道伊賀青山線緊急道路整備事業に伴う川南D遺跡・勝地中世墓群の発掘調査結果をまとめたものである。

2. 調査は下記の体制で行った。

調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査第1課
調査協力 三重県土木部道路建設課
上野土木事務所
青山町教育委員会
地元（北山・勝地・妙楽寺）各位

3. 調査面積、期間、担当者は次のとおりである。

遺跡名	所在地	面積	期間	担当者
川南D遺跡	青山町勝地川南	500m ²	平成5年6月28日 ～7月15日	主事 筒井正明 〃 高崎仁
勝地中世墓群	青山町勝地大坪 ～妙楽寺砂田	250m ²	平成5年8月30日 ～9月28日	主事 森川常厚 研修員 船越重伸

4. 本書の作成は、筒井正明、森川常厚が行い、文末にその名を記した。トレースについては、調査担当者の他に管理指導課業務補助員石橋秀美、北山美奈子、植 純子が行った。

5. 図面における方位は、全て磁北を用いた。当地域の磁針方位は、西偏6°30'（平成元年）である。

6. 本書に使用した事業計画図面は、土木部の提供による。

7. 本書で用いた遺構表示略記号は、下記による。

S K : 土坑 S Z : 不明遺構・その他

8. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。

各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I. 前言	(森川常厚)	1
II. 位置と歴史的環境	(筒井正明)	1
III. 川南D遺跡	(タ)	4
1 はじめ		4
2 遺構		4
3 遺物		7
4 小結		8
IV. 勝地中世墓群	(森川常厚)	9
1 はじめ		9
2 遺構		9
3 遺物		9
4 小結		9

挿図目次

II. 位置と歴史的環境	第7図 SK4 実測図	6
第1図 遺跡位置図	第8図 出土遺物実測図	7
第2図 遺跡地形図	IV. 勝地中世墓群	
III. 川南D遺跡	第9図 調査区位置図	9
第3図 調査区位置図	第10図 調査前測量図	10
第4図 調査区土層断面図	第11図 遺構平面図	11
第5図 遺構平面図	第12図 SZ1 実測図	11
第6図 SK2 実測図	第13図 SX1 五輪塔実測図	12

図版目次

P L. 1 川南D遺跡 調査区全景	P L. 3 勝地中世墓群 調査区全景、SZ1
SK2、出土遺物	P L. 4 勝地中世墓群 調査風景
P L. 2 勝地中世墓群 調査区全景	SZ1 調査風景

I. 前 言

三重県教育委員会では、国及び県にかかる各種公共事業に関して、各開発部局の事業を照会し、事業予定地内の文化財の確認と、その保護に努めている。

こうしたなかで、三重県土木部道路建設課から、県道伊賀青山線緊急整備事業計画の照会を受け、三重県埋蔵文化財センターが事業予定地内の遺跡分布調査を実施した。調査は、平成2年度に行われ、その結果、事業地内に川南D遺跡と勝地中世墓群が存在することが判明した。

そこで、川南D遺跡は平成3年度に試掘調査を実施し、500m²について遣構、遺物を確認した。勝地

中世墓群については、事業範囲に接して、塚状盛り土や五輪塔が散乱する状況から、尾根上650m²を遺跡範囲とした。

両遺跡の取り扱いについては、その保護に努めるよう県土木部・上野土木事務所と、県教育委員会文化振興課・県埋蔵文化財センター間で協議が重ねられたが、現状保存が困難なため、やむなく発掘調査を実施し、記録保存することになった。その後、勝地中世墓群については、遣構、遺物が検出されないため、250m²に調査範囲を縮小した。

(森川常厚)

II. 位置と歴史的環境

青山町は、伊賀盆地の東南端に位置する南北に長い方形の町域を有し、布引山地を経て東は一志郡白山町と南は同郡美杉村と接し、西は山岳部を経て名張市、北西は上野市、北東は阿山郡大山田村と接する。伊勢・伊賀両国を分ける布引山地に源を発する奥山川・青山川・柏尾川や、町南部の室生山地から源を発する川上川・前深瀬川等は、やがて木津川に合流する。木津川はその後他の河川と合流し、木津を経て宇治川・保津川とともに淀川となり、大阪湾に注ぐ。

川南D遺跡（1）と勝地中世墓群（2）は、奥山川が木津川に合流する青山町勝地に位置し、行政上はそれぞれ名賀郡青山町勝地字川南、同勝地字大坪～妙楽寺字砂田である。

青山町での遺跡は、ナメリ石谷遺跡、種生八王子遺跡、勝地大坪遺跡（3）などから縄文早期にまで遡ることができ、弥生時代も柏尾遺跡（4）から出土した銅鐸などから、当然それに伴う地域集団の存在が確実視できる。

古墳時代には、巨大古墳は確認されてはいないものの、平成3年度に発掘調査が行われた勝地大坪古墳群（3）などの多くの群集墳が、木津川を挟んだ丘陵上に存在することから、人々の活動がより活発化して行ったことが確認できる。おそらく木津川の

本・支流を介在して、城之越遺跡（5）を中心とする伊賀盆地南部の勢力下にあったものと思われる。

歴史時代に入ると畿内の東限が名堅の横河（現名張川）とされたように、青山町域は畿内と東国の境の地として認識され、さらには畿内と伊勢神宮・斎宮との交通路としての性格を強め、阿保には天皇や斎王の頓宮が設置されている。天平12（740）年藤原広嗣の乱の際の聖武天皇の東国行幸には伊賀郡阿保・伊勢国一志郡河口に頓宮を設け、河口には関塞も置かれ、当時大和～伊勢国のルートとして、青山峠経由の阿保・川口間の行程が存在し、重要視されていたと推測できる。またそれ以前の持統6（692）年、天皇の伊勢・志摩行幸も同ルートで伊勢へ出たと推測でき、この際も阿保に頓宮が設置された可能性もある。斎王の群行も飛鳥に京があった時代にはこのルートをとったものと推定でき、平城・平安京都遷都後にも斎王の凶事の際の退下には同ルートが利用され、その際には斎王の頓宮が設置されたのであろう。

平安時代中期には藤原実遠が伊賀国に広大な荘園を有し、その所領の中に上津阿保村・中津阿保村が見え、当時の青山町域に実遠の荘園があったことが確認できる。古代の当地域の遺跡としては、平成4年度に調査が行われた川南A遺跡（6）があり、奈

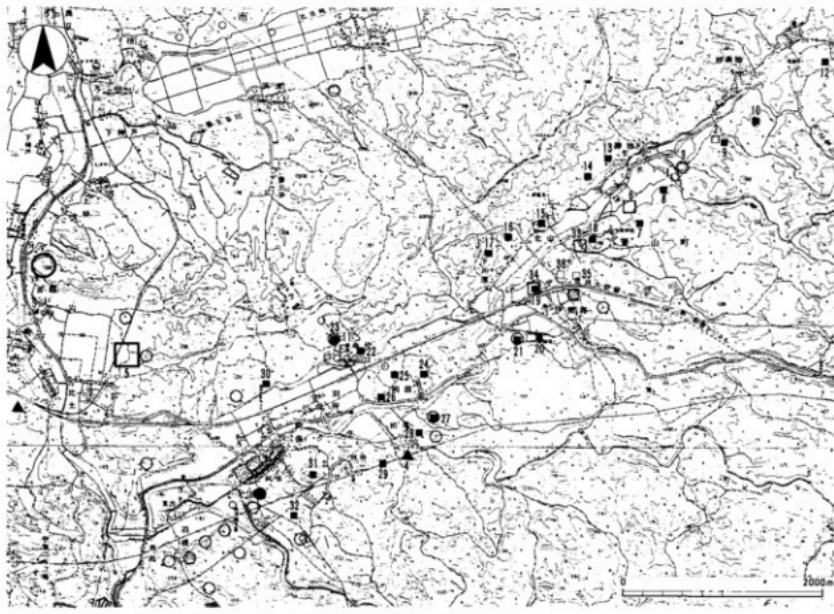
良時代の庵を有する堅穴住居や、平安時代の掘立柱建物が検出されている。

中世以降青山峠経由のルートは、まず前代以来からの莊園年貢等の輸送路として、人々や物資の流れが活発化して行く。この時期には当地域でも中世の寺社勢力が領土的にも、またその信仰面でも影響力を大きく浸透させることとなったのである。事実、阿保村に伊勢神宮の阿保神田や石清水八幡宮の阿保庄^⑨が確認できる。また七仏薬師院・寺脇地蔵堂（現宝嚴寺）の寺院の存在が確認されるが、いずれも大和西大寺との関係が深く、当時の本山・末寺関係から考えると、事实上大和西大寺の所領が当地域に存在したと思われる。大和西大寺を本山とする真言律宗では、創尊以来在地の有力者の援助の下でその勢力を拡大して行った経緯があり、当地域への密着度も高かっただろうし、現世利益を旨とするその信仰

面でも、当地域での在地勢力への影響が大きかったものと推測できる。

一方陸路同様、青山町を西流する木津川の水運は重要である。木津川は、古代には平城京内の建築材の運搬に利用されたのをはじめ、中世には伊賀国東大寺領の袖山から泉津までの材木運搬路として等、古代以来畿内の水運の大動脈として人々に多大な恩恵を与えてきた。確かに木津川の水運の主要路はこの青山町域までの上流には及んではないが、その影響はこの地域にも人々や物資の流れに大きな影響を及ぼしたものと推測できる。

さらに中世後期になると、長谷備・伊勢参宮の隆盛に伴う信仰道としても青山峠経由のルートの整備が行われたであろうし、この道路の維持管理が周辺住民の勤進・奉仕によって継続されたと思われ、おそらくその中心となったのは、莊園制下の名主層等



■…中世城館 ▲…銅鐸出土 ○…古墳、古墳群 □…その他の遺跡 ●…伝阿保領宮跡
1. 川南D 2. 勝地中世墓群 3. 勝地大坪 4. 柏尾銅鐸出土 5. 城之越 6. 川南A 7. 十郎館 8. 城氏城 9. 戸内氏城
10. 紗奈寺城 11. 安田中世墓 12. 滝三河宅址 13. 新左近宅址 14. 萩二郎城 15. 小島氏館 16. 本田氏館 17. 西尾氏館 18. 宮下若
19. 高鷲氏宅址 20. 城氏宅址 21. 富增伊屋 22. 浅田氏館 23. 川上氏館 24. 竹内左馬介館 25. 宮崎氏館 26. 竹岡兵庫館
27. 小林氏館 28. 本田氏館 29. 岩野氏宅址 30. 朝妻城 31. 榎森氏城 32. 桐ヶ谷堡 33. 久保 34. 浦木戸 35. 六地藏A 36. 六地藏B

第1図 遺跡位置図（1：50,000）【国土地理院「伊勢路・阿保」1：25,000より】

から成長してきた在地で大きな勢力を持つ小領主層であろう。

中世の伊賀国では在地の小領主層の勢力が強勢で、ついに伊賀一国を支配する守護大名・戦国大名の支配体制が実現することがなかった。乱立する伊賀国各地の小領主層は、青山町域では木津川沿いに多くの城館を構えるに至った。青山町域の中世城館については、宝暦年間に編纂された『三国地誌』に約67の堡・宅址が所載されており、近年の調査でも47の中世城館が遺跡として確認されている。^⑨ 勝地周辺にも十郎館（7）、城氏城（8）、藪内氏城（9）、妙楽寺城（10）等の中世城館が分布する。彼等小領主層は、その勢力範囲の住民支配の安定のためにも、また畿内と東国を結ぶ交通の要路獲得を狙う隣国の大勢力への防備のためにも、地域的な一揆体制を強

固なものとし、内・外圧に挑んだものと思われる。

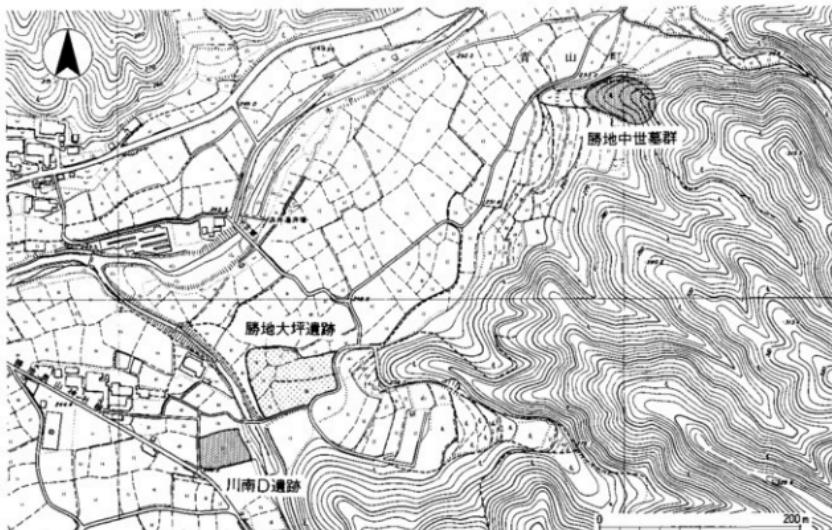
一方、青山町域でもいわゆる中世墓がいくつか確認されており、宝嚴寺裏山に位置する安田中世墓（11）は、その性格から先の中世城館を築いた小領主層によって営まれたものと思われ、彼等は対支配住民のための一環としても、優越的な墓地を営んだのである。当時の在村寺庵が名主、地侍層のひとつ姿であったことを考慮に入れれば、一揆の組織者の中には寺庵もあり、信仰面からの支配住民の生活の掌握も行われたかもしれません。優越的な中世墓の存在はこのこととも関係するかもしれない。伊賀地方の中世を担った彼等在地の小領主層も、天正伊賀の乱によりその勢力は大打撃を受け、やがて伊賀地方の中世は終焉を迎えることとなる。

（筒井正明）

〔註〕

- ① 徳積裕昌ほか『城之崎遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1992
- ② 『日本書紀』
- ③ 藤本利治『伊賀国』『古代日本の交通路Ⅰ』大明堂 1984
- ④ 『東南院文書』『平安遺文』
- ⑤ 吉澤 良『川南A遺跡』『伊賀国府跡（第5次）・箕井館ほか』三重県埋蔵文化財センター 1993
- ⑥ 『神風抄』『群書類從第1刷』
- ⑦ 『石清水文書』『鎌倉遺文』

- ⑧ 中 真夫「第五編 中世」『青山町史』青山町史編纂委員会 1979
- ⑨ 黒田俊雄『寺社勢力』岩波書店 1980
- ⑩ 三浦圭一『戦国期の交易と交通』『岩波講座日本歴史』8 岩波書店 1976
- ⑪ 『青山町の文化財』青山町教育委員会 1991
- ⑫ 森川櫻男ほか『安田中世墓発掘調査報告』青山町教育委員会 1988
- ⑬ 註⑨と同じ



第2図 遺跡地形図（1:50,000）

III. 川南D遺跡

1. はじめに

事業範囲内の500m²について調査を行った。調査区は奥山川の左岸に位置し、現況は水田で、標高は247.48mである。調査区の北西約220mで奥山川は木津川と合流する。調査開始の前に耕作土の大部分は除去した。

2. 遺構

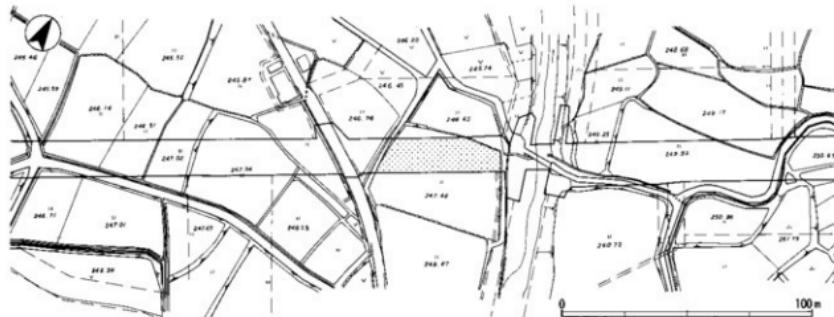
当遺跡の遺構検出面までの基本的層序は第Ⅰ層：耕作土、第Ⅱ層：暗灰褐色土（遺物包含層）、第Ⅲ層：黄褐色砂質土（地山）である。ただし、調査区のNo 7地区以東は茶褐色土や青灰色土、暗灰褐色土に径10~20cmの礫が大量に混入する層の下層に、黄褐色砂質土に径10~50cmの礫が大量に混入する土層が150cm以上の深さで続くことから、奥山川の氾濫原であったと思われる。このため該当部分では、小穴状の遺構がいくらか検出されたが、これらはすべて礫等による窟みであると判断した。また、調査区中央部に約10mの幅で径10~100cmの礫を大量に含む層（土層図No 7）が南北に走るが、約100cmまで掘削した後、作業は危険と判断し掘削を中止した。この層の性格は不明。地山面は、おおむね調査区の西から東へ、すなわち奥山川の方向へ落ちて行くものと思われる。遺構はNo 5地区以西の黄褐色砂質土の地山部分で3基の土坑を検出した。また、30cm

前後の柱穴もいくつか検出しているが、建物としてはまとまらなかった。

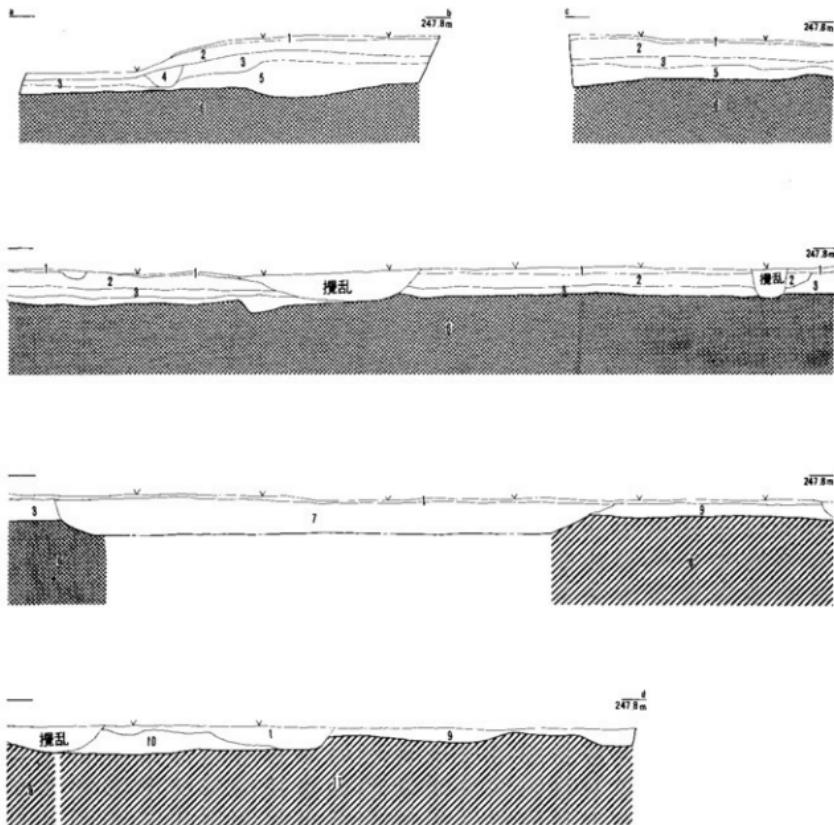
S K 2 南北6.8m以上、東西3.4mの長楕円形を呈し、さらに調査区外北へ続く土坑で、深さは約0.20~0.48mである。土坑の西壁に沿って径20~60cm大の石が配置されている。北側の石列は、おおむね径30cm大の石の配列が約3m部分検出され、さらに調査区外北へ続くものと思われる。これらの石は土坑の最深部から約0.2cm上の高さで、土坑の西縁に並ぶ。南側の石列は約60~30cm大の石が、土坑の西壁の底に沿って約2.5mにわたって配列される。当初は北側の石列に伴うものと南側の石列に伴うものとの、2つの土坑が重複するものと考えていたが、掘削の過程でそれを確認することはできなかった。埋土は暗灰褐色土である。土器類・鍋、信楽焼の甕、白磁皿等中世（14世紀前半~16世紀後半）の遺物が出土する。この土坑の時期は複数の土坑が重複している可能性もあるため、14世紀前半~16世紀後半と幅広く考えておく。

S K 3 南北2.8m東西3.0m隅丸方形を呈す。深さは約0.35~0.40mで、出土遺物はほとんど無かった。この土坑の時期は不明である。

S K 4 南北1.0m、東西約0.8mの楕円形を呈す。深さは約0.10~0.25mで、南北の両端にそれぞれ石列が見られる。北の石列は約20~50cm大の石が約1.6m、南は約20cm大の石が約1.2mに、ほぼ東西に

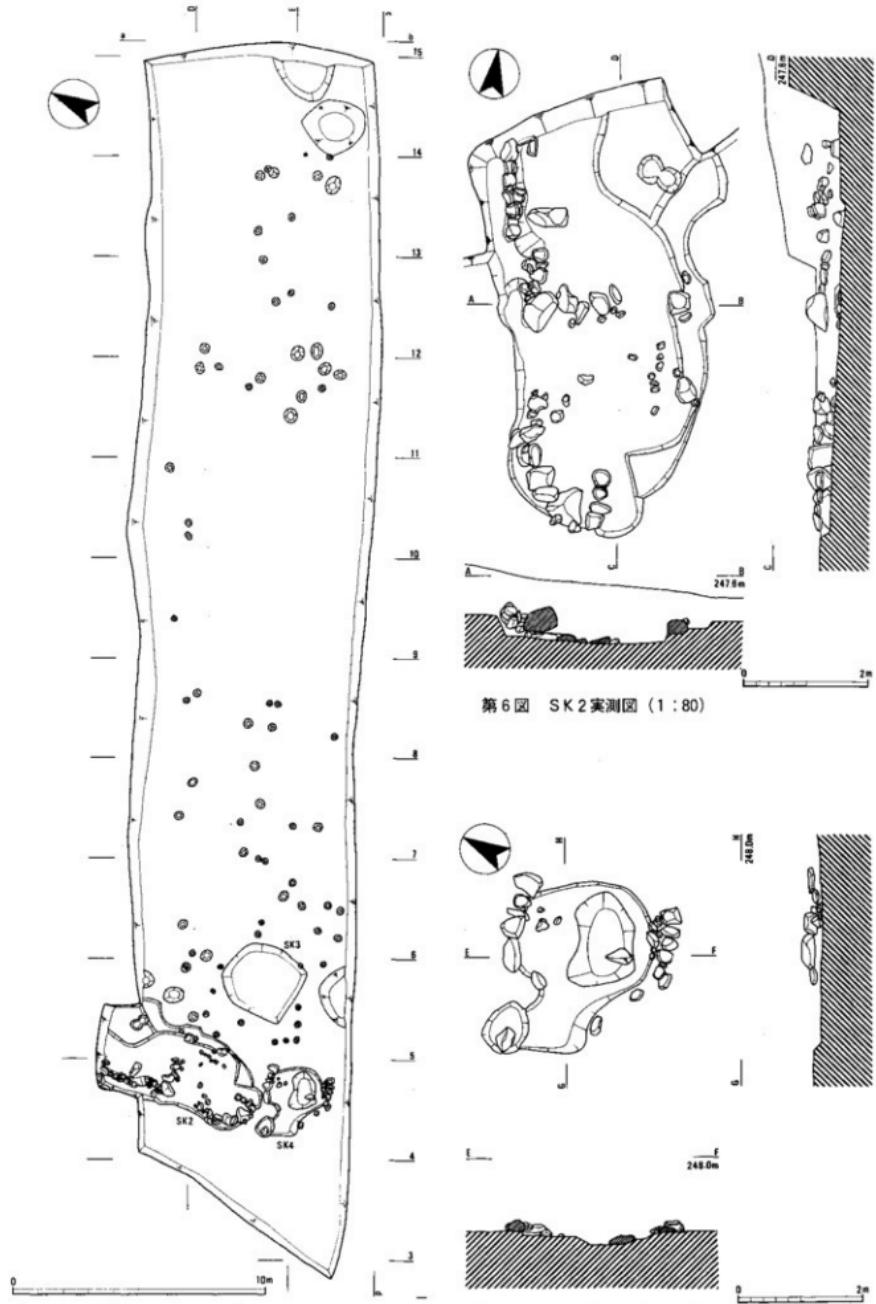


第3図 調査区位置図 (1 : 2,000)



- 1 : 耕作土
 2 : 茶褐色土に10~20cmの礫が混入
 3 : 青灰色土に10~20cmの礫が混入
 4 : 黄褐色土に灰土色土が5~10cmのブロック状に混入
 5 : 暗灰色土に10~50cmの礫が混入
 6 : 黄褐色砂質土に10~50cmの礫が混入
 7 : 黄褐色砂質土に10~100cmの礫が混入
 8 : 灰黄色砂質土に10~50cmの礫が混入 (地山)
 9 : 暗灰褐色土 (包含層)
 10 : 黄褐色砂質土に暗灰褐色土が混入
 11 : 黄褐色砂質土 (地山)

第4図 調査区土層断面図 (1 : 100)



並ぶ、遺物は中世の物との思われる土器の細片が出土するのみである。SK 2に近接することや石列が見られることなどから、SK 2と同じような時期のものと思われる。

3. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、大部分が中世の物であるが、包含層遺物の中には古墳時代の物もいくらか見られた。

SK 2出土遺物（1～8）

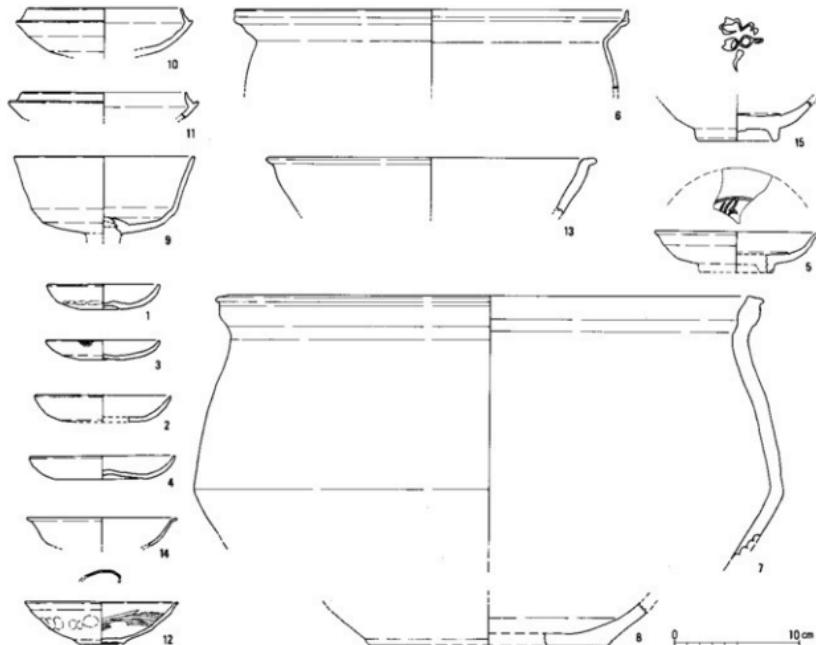
土師器皿・鍋、信楽焼甕、白磁皿がある。

土師器皿（1～4）は外面はオサエ、内面はナデで調整し、口縁部を内湾気味に立ち上げ、口縁端部は細く終わる。またこれらの土師器皿は、法量から口径9.0cm・器高2.0cmの（1）と同9.2cm・1.6cmの（3）の小皿と、口径10.8cm・器高2.1cmの（2）と同11.6cm・1.8cmの（4）の中皿に分類できる。（1）と（4）は底部外面の中央部から強いユビオサエが

見られ、窪みが認められる。（3）は口縁端部に油煙が残っていることから灯明皿として使用されたものと思われ、また内面のナデは一定方向に施されている。

土師器鍋（6）はいわゆる「伊勢型」鍋と呼ばれるもので、口縁端部を内側に折り返し、折り返し部分中程に沈線状のものが認められる。さらにその口縁端部はやや外反し、内外面共にヨコナデが施される。頸部にも内外面共にヨコナデが施されるが、外面にハケメは認められなかった。伊藤編年の第4段階c形式に相当すると思われる。

信楽焼甕（7）は口縁端部を外側に折り返し、内外両面から強くユビナデを施す肉厚の縁帯を持ち、肩のほとんど無い形態である。体部の内面はナデで調整され、外面の上半は板状工具によるヨコナデ、下半は板状工具によるタテナデが施される。松沢編年のV期に相当すると思われる。信楽焼甕（8）は、同（7）の底部の可能性がある。



第8図 出土遺物実測図 1～8はSK 2出土、9～15は包含層出土 (1:4)

白磁皿（5）は、内外面共に施釉され、口縁は外反する。高台は削り出した高台で、その端部は露胎している。底部内面に沈線、陰刻花文が施されている。

包含層遺物（9～15）

須恵器杯身・高杯、瓦器碗、信楽焼鉢、白磁皿、青磁皿がある。

須恵器杯身（10・11）は口径が12～13cmで、口縁部の立ち上がりは短く、受部はやや上向き外方へのびる。内外面をロクロナデにより調整し、（10）の底部外面にはヘラ切りの跡が認められる。共に田辺編年のTK209あるいはTK217^①に相当すると思われる。

須恵器高杯（9）の杯部は口縁部が直立気味に外反し、比較的深い椀形を呈す。体部外面に棱線は認められず、底部内面に焼き痕が認められる。須恵器杯身（10・11）と同時期のものと思われる。

瓦器碗（12）は口縁部外面に強いヨコナデが施され、口縁端部に沈線が施される。底部には断面三角形の低く小さい高台が貼り付けられる。体部内面のヘラミガキはかなり粗く、体部外面のヘラミガキは施されない。体部外面の指掌痕はわずかに痕跡が認められる程度で、底部内面のヘラミガキも1条かずかに遺存するのみである。山田編年のⅢ段階2型式^②に相当すると思われるが、遺存部分の歪みが大きいためか、復元した口径が12cmとやや小さい。

信楽焼鉢（13）は口縁部端部を外反させるために強く押し、内外面共にロクロナデで調整する。遺存部分に描目は認められない。山田編年のⅡ b型式^③に相当すると思われる。

青磁碗（15）は断面四角形を呈す高台で、底部外

面中心部分に直径1.5cm程度で円形状に釉が残存することから、施釉の後高台内部の底部を削りとったものと思われる。底部内面に沈線が認められ、花草文のスタンプが押されるが、施釉のためこれらは明瞭に確認することはできない。

その他、口縁端部が外反する白磁皿（14）が出土した。

4. 小結

今回の調査では性格の明らかな遺構は検出されなかった。ただ、その出土遺物から推測できることは、調査地区の付近が7世紀前後の古墳時代後期と、14世紀前半～16世紀前半の中世の2つの時期の遺物が集中することである。包含層出土の須恵器は、当遺跡と奥山川を挟んで隣接する勝地大坪古墳群の出土遺物とはほぼ同時期の物と思われる。おそらく7世紀前後の今回の調査区付近は未開墾の丘陵地の先端が統き、勝地大坪古墳群と同規模の古墳が築造されていたか、古墳を築造した集団の集落が存在したのであろう。その後当地域の開墾等の開発が進み、中世の時期にはある程度の規模でその開発も本格化して行ったのであろう。特に中世城館の城氏城が当遺跡南方約300mの山麓に立地することを考えれば、同中世城館を営んだ在地の小領主層の影響下で、当地域の開発が本格化していったのかもしれない。いずれにしても青山町の大部分が山地および丘陵地であり、先史以来木津川沿いのごく限られた低地や台地上の開発が始まり進行して行ったものの、伊勢・大和地方等の隣国に比べ、農業生産力は低かった。しかし、その通行上での要地から歴史のさまざまな舞台に登場することとなる。

（筒井正明）

〔註〕

- ① 新田 洋「平安時代～中世における煮炊用具－『伊勢型』鍋－に関する若干の観察」『三重考古学研究』1985
- ② 伊藤裕伸「中世南伊勢系の土器器に関する一試論」『Mie history vol.1』三重歴史文化研究会 1990
- ③ 松沢 修「信楽焼の編年について」『中世の信楽－その実像と編年を探る－』滋賀県立近江風土記の丘資料館 1989
- ④ 『陶邑古窯址群』平安学園考古クラブ 1966

- ⑤ 山田 猛「瓦器に関する若干の考察」『中世土器の基礎研究』II 『中世土器研究会』1986
- ⑥ 山田 猛「下郡遺跡出土の推鉢」『Mie history vol.1』三重歴史文化研究会 1990
- ⑦ 吉澤 良「勝地大坪遺跡、勝地大坪古墳群」『平成2年度農業基盤整備事業地域 墓藏文化財発掘調査報告－第1分冊－』三重県埋蔵文化財センター 1992

IV. 勝地中世墓群

1. はじめに

調査はまず、遺構の存在が最も有力視される尾根に沿って幅4mのトレンチを設定し、それを拡張していく方法で行った。その結果、遺構、遺物とともに検出できなかったため、250m²で調査を打ち切った。その後、事業範囲外の塚状盛り土の清掃と測量を行った。その時発見された五輪塔は現地で実測を行い、再び現状に戻し、全ての調査を終了した。

2. 遺構

調査区南東側で小穴を3基検出したが、いずれも出土遺物がなく、埋土に腐食土が混じることから、木の根の痕跡等で、遺構とは認められない。

調査区内に点在する石は、当初中世墓に関連するものと考えたが土坑を伴わず、また検出面から浮くものや、検出面内に入り込むもの等様々で、自然のものと判断できた。

S Z 1 調査区東側に接して位置するが、事業範囲外である。このため、清掃と測量を行うにとどめた。頂部一辺3m弱、基底部5~5.5mの方墳状の盛り土である。高さは、西側で1m、山側の東側では20cm強である。南側は不鮮明なもの、西側を除く3方には周溝が存在するようである。墳頂には、20~40cmの石が雜然と置かれ、この集石に混じて五輪塔（1~5）が認められた。これらは、五輪塔としての意識ではなく、石として扱われているようである。

ある。

3. 遺物

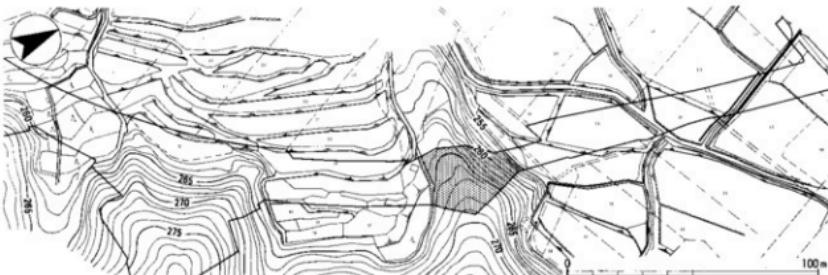
調査区内からの遺物の出土は全くなかったが、S Z 1 の清掃中に出土した中世陶器壺片1片と集石中の五輪塔がある。（1~5）は、いずれも組み合わせ式五輪塔で、S Z 1 集石中に存在したものである。

（1）は空風輪で、柄を有するものである。（2~4）は火輪で、（2）の軒は直線的であるが、軒厚は厚い。（3, 4）は反った軒をもつが、軒厚は（2）に比べ薄いものである。（5）は水輪で柄をもつ。石材は、全て花崗岩もしくは花崗岩質砂岩と考えられる。

4. 小結

今回の調査では、遺構、遺物ともに検出されず、調査区内に中世墓は存在しなかった。しかし、事業範囲東側に接して塚状遺構S Z 1 があり、五輪塔も認められることから、付近に中世墓の存在は推定できる。調査区内は、過去に果樹園として利用されたことがあったようで、遺跡は、そのとき削平されたか、流失してしまった可能性も残る。

S Z 1 については、清掃のみの調査であるために詳細は不明であるが、その状態から塚と考えられる。しかし一般に、塚の造営目的には多様の意識が反映されている。このため、伝承さえも残っていない現状では、その目的を推測することさえ困難である。



第9図 調査区位置図 (1 : 2,000)

当尾根は、勝地と妙楽寺の境界に位置する。尾根の南側斜面に、山頂方向への山道があるが、これは、材木運搬の木馬道であり、古街道ではない。また、他に塚状盛土が認められず、単独で存在するものである。墳頂の集石は葺石か、あるいは祠の基礎と考えられる。集石中の五輪塔は、既述したように直接SZ1とは関係ないものである。以上から、街道の目印や十三塚の可能性は低く、各種供養塔か、経塚、墳墓によるものと思われる。

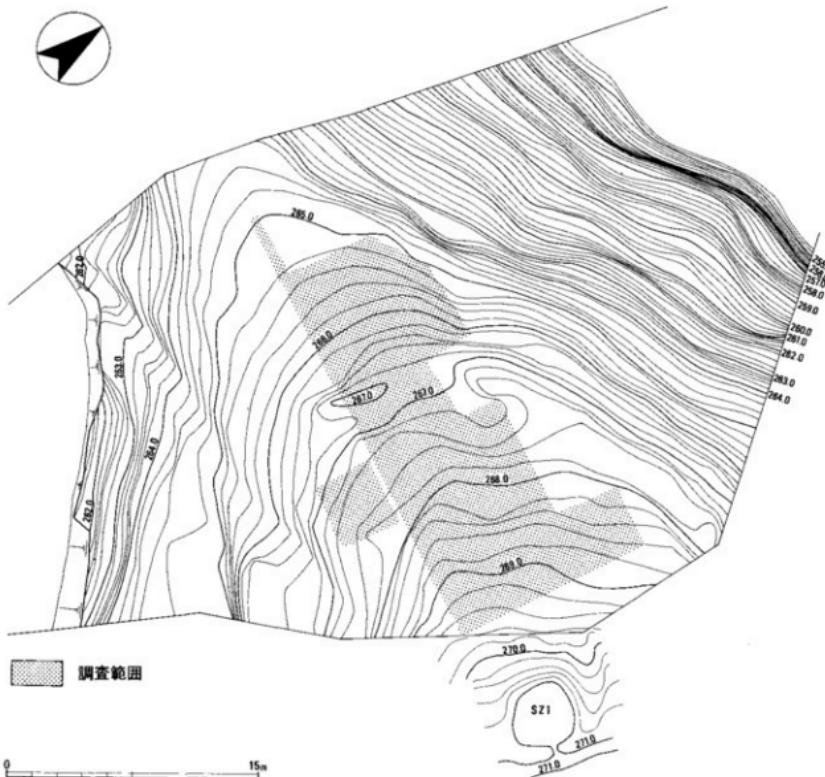
次に、集石中の五輪塔は、柄をもつもの、軒が反るもの、軒厚が厚いものがあり、組合式であること等、古い要素をもち、およそ15世紀のものと考えら²。

れる。したがって、この塚も15世紀以降の築造と推測される。

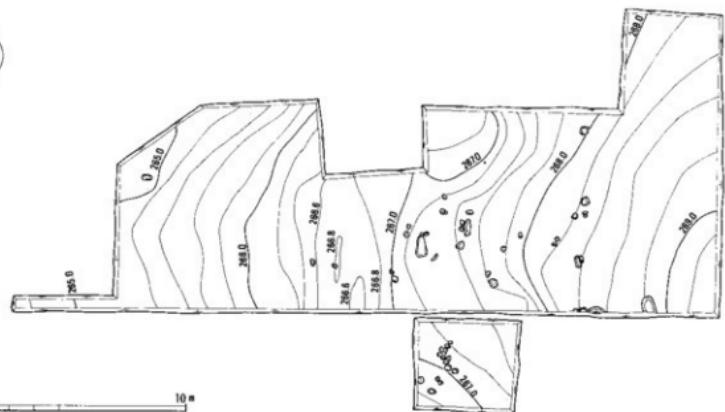
(森川常厚)

[註]

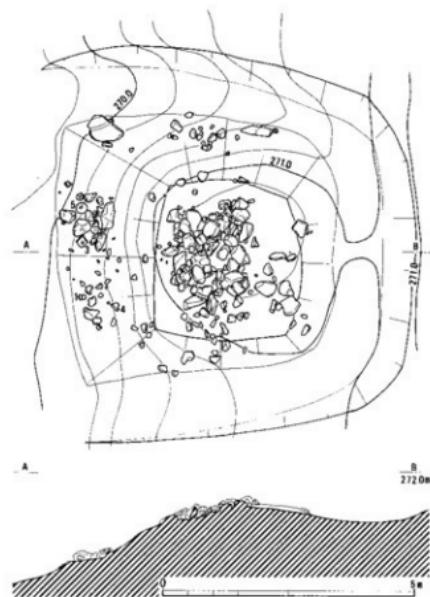
- ① 板詰秀一 「「塚」の考古学的調査・研究」 [考古学ジャーナル3 NO.274] ニュー・サイエンス社 1987
- ② 加藤恵子ほか 「(5) 石塔」「一の谷中丘墓群遺跡」 磐田市教育委員会 1993



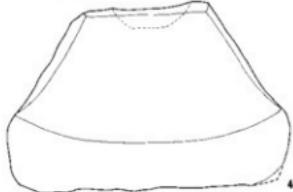
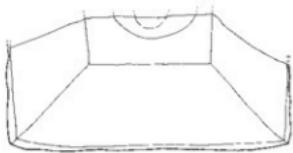
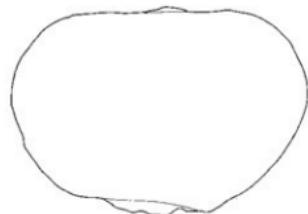
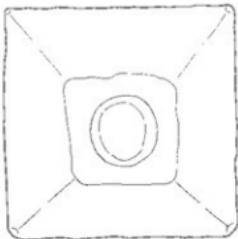
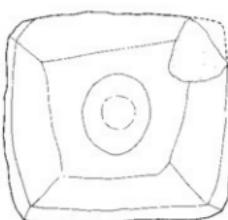
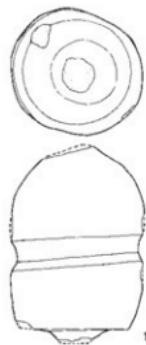
第10図 調査前測量図 (1 : 300)



第11図 遺構平面図 (1 : 200)



第12図 SZ1 実測図 (1 : 100)



0 20 cm

第13図 SZ1五輪塔実測図 (1:4)



調査区全景 (西から)



SK 2 (南から)



SK 2出土遺物 (1 : 3)



包含層出土遺物 (1 : 3)

P L 2 (勝地中世墓群)



調査区遠景（北から）



調査区全景（東から）



調査区全景と S Z 1 (西から)



S Z 1 (西から)

P L 4 (勝地中世墓群)



調査風景（東から）



S Z 1 調査風景（西から）

平成 6(1994) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 5 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 119

川南D遺跡・勝地中世墓群発掘調査報告

名賀郡青山町勝地～妙楽地

1994（平成 6）年 3 月

編集 三重県埋蔵文化財センター
発行

印刷 東海印刷株式会社
